

己を潔くする道

辻 憲男（文学部教授）

お軽勘平というのは『仮名手本忠臣蔵』の最大のもくろみ話である。主君の一大事の時に、腰元と近侍が密会していた。申し訳が立たぬ、が「ひとまず夫婦が身を隠し、時節を待って願うてみん」と、お軽の里へ落ちて仇討ちの資金を工面する。－実在した「三平」は浅野内匠頭の小姓で、凶変を赤穂へ急報した一人。生家の門前まで来た時母の葬式を知ったがそのまま走り過ぎた、というのは有名な巷説だが、あわれ、翌春に忠孝の板ばさみになって命を縮めた－。『忠臣蔵』はお軽を祇園の名妓にし、勘平の無念を晴らすという見せ場をつくった。

元禄の將軍は徳川綱吉。側用人（そばようにん）柳沢吉保は、浪士たちの処分について儒者・荻生徂徠（おぎゅうそらい）に下問した。徂徠は「義は己を潔くするの道」であり「法は天下の規矩（きく）」であるから、報讐という私論をもって政道の公論を阻害すべきでない、と断じた。義を是認しながら、助命ではなく厳刑でもなく、彼ら武士の礼たる切腹とすべしというのである。もっとも市中には悪法「生類憐れみの令」がまかり通っていた。庶民感情からすれば、なんとちぐはぐな世の中であったことか。

幕末の大阪。適塾に入った福沢諭吉は朋輩とよく議論をした－義士は果たして義士なるか不義士なるか。しかし合理家の諭吉は、「どちらでもよろしい、義不義、口の先で自由自在」と、是非ではなく、今日のディベートのような弁論を楽しんだという（『福翁自伝』）。そこに学問の糸口があった。



かやのさんべい
旧西国街道に面する萱野三平邸。大阪府箕面市萱野。
芝居ではイノシシも出る山崎村（京都府大山崎町）。